



スタイリッシュ・カリズマ

第六回 (最終回)

衣服改革の夢

中野香織=文

by Nakano Kaori

元首相が大真面目に提唱した省エネ・スーツは、失笑のうちにうやむやにされて忘れられた。

企業主導の強引なカジュアルデイはいちおう定着したかもしれないけれど、それ以外の日に着るスーツにカジュアル化の影響が及んだかといえば、決してそうではない。

1850年代のイギリスで、フロックコートが近代市民社会の昼間の男の制服として定着して以来、今日に至るまで、男の正装はなかなか改変を受け付けようとしな。

しかし、この150年の間に、男性服をなんとか着心地よく変えようという、大がかりで大真面目な改革運動が何度も行われてきているのである。

そのなかでも大きな波としてとらえられるのが、19世紀末のオスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)による唯美主義運動と、1929-1937年の男性服改革党(Men's Dress Reform Party)による改革運動である。

彼らはいったい男の服の何が不満で、何をどう変えようとしたのか。

そしてその首尾やいかに。

男性服改革が成功するとすれば、その秘訣はいったいどこにあるのだろうか？

地ならし機、黒いフロックと燕尾服

1850〜60年代イギリス、男のドレスコードは次のように定着する。

昼間は黒いフロックコート、それに準ずる服としてモーニングコート。そして夜間の正装には黒のイフニングドレスコート(燕尾服)。

1840年代に飛躍的に成長した既製服産業は、それまでファッション戦争の部外者であった労働者階級の男をもこれに引き込み、一見したところ、誰もが似たような黒い制服に身を包んでいるという光景をつくり出す後押しをした。

フランスでも状況は同じである。ポードレルはこの黒いフロックコートと燕尾服を「民主精神の制服」とみた。もちろん、清く正しい民主精神ではなく、「死と同じく、地ならし機(levain)」という意味の平等意識をここに読みこまねばならない。

誰もが同じ服を着るからこそ、TPOの決まりの守り方、持ち物のあしらい、立ち居振る舞いに、かえって品格や階級

がいつそう鮮明に現れる。それゆえ、19世紀後半にはマナーブックの類がつかないほど氾濫することになる。専門を細分化された「紳士の小道具」店が並立しはじめられるのも、まさしくこの時代である。

日本の明治政府が1868年に「服制をイギリスに学ぶ」(ちなみに憲法のお手本はプロシア、マナーはフランスである)として取り入れた服こそ、この時代のイギリス服にはかならない。

ワイルドが提案した美しい衣服

ブリティッシュ・エンパイアの拡大とともに世界中に普及したこの黒いフロックコートや燕尾服は、現代の目にはそれなりにスタイリッシュとも映るのであるが、実は、同時代人のなかには、これを「醜悪」と感じる人々が少なくなかった模様なのである。

たとえば、1888年の「イングリッシュウーマンズ・ドメスティック・マガジン」誌は、男性服の上着とズボンには美的価値が皆無であると嘆き、男性はブリーチズ(半ズボン)に回歸すべきであ

る、と提唱する。

唯美主義(Aestheticism)を掲げて世に出んとしていたオスカー・ワイルドもその一人。大きな襟がついた丈の短い上着にブリーチズという「唯美主義衣装(Aesthetic Dress)」を着て社交界をのし歩いたことで有名な彼は、1890年に「デイリー・テレグラフ」にあてて、「現在はやっている黒い制服はみすばらしくて、暗くて、うんざり」し、「美しいとは言えない」という抗議を書き送っている。どうやら彼は身をもって「ジェントルマンの制服」に抵抗していた節がある。

もちろん、ワイルドの衣装は人目をひくための手段としても機能したことは否定できない。1882年、28歳の時に唯美主義衣装をまとってロンドンの社交界に出入りし始めた頃のワイルドは、まだ本格的な創作活動をしていただけでもないのに、その大胆な衣装と派手な交友関係と鮮やかな警句(エピグラム)がマスコミにやんやとからかわれることで、一躍名を知られた人になる。スキャンダルでデビューしようが、名が広まれば有名人。このからくりを大い

に利用したワイルドであったが、彼の本領はその後に発揮される。アメリカ、カナダ、および国内での講演活動を通じて、華麗な衣装と重厚な話しぶりて人々を陶醉させ、本物の大スターになるばかりか、劇作・創作の分野でも次々に大ヒットを飛ばし、押しも押されぬ時代の寵児となった。

唯美主義衣装をこのように「ステージコスチューム」として利用する一方で、実は彼は大真面目に衣服改革を考えてもいたのである。1881年に結成された合理服協会(Rational Dress Society)の唯一の男性会員として、衣服改革に積極的に関わっている。(ちなみに、妻のコンスタンスはこの協会の議長もつとめている)。この協会はおもに女性服の改革に携わってきたが、ワイルドはエッセイや講演のなかでは男性服に対する改革の提案もおこなっている。

そのなかで彼がくり返し語るのには、衣服における美しさの重要性である。では、美しい衣服とは？ 「制約し、束縛し、毀損するものはすべて醜悪。自由、快適さ、環境への適応

性という真の法則にかなった衣服であるならば、それこそが美しい服ということである」

制約し、束縛し、毀損するのは燕尾服やフロック・コートだけではなかった。ビクトリア朝社会のモラルそのものが、人間の本来の姿を制約し、束縛し、毀損するものだったのだ。自由で快適な精神活動を追求するワイルドは、この巨大な敵と一人て闘おうとしたが、ついにはホモセクシュアルの「罪」で有罪宣告を受け、入獄させられることになる。

アグリ、ダーティ、アンヘルシー!

いかに美しさをめざす服であろうと、ワイルドのような奇才が一人でがんばっても社会的な衣服改革は到底達成しえない。集団で行えば社会改革になることで、一人ではやればアナキズムとなる。

ということを知っていた「衣服の心理」の著者、ジョン・カール・フリーゲル博士は、1929年、男性服を組織的に大々的に改革しようとする。フリーゲル博士といえば「男性によ

The Genealogy of the Stylish Charisma

る偉大なる放棄 (Great Masculine Renunciation) 説 (19世紀に男はファッションの楽しみをすべて女性に委ね、自らには味気ない制服に身を包んで仕事に専念するようになった、という説) で有名な心理学者であるが、彼が発起人となって旗揚げされたのが、「男性服改革党 (Men's Dress Reform Party)」(以下MDRRPと表記) である。

今度の改革の中心メンバーはすごい。聖パウロ寺院のインジ主任司祭、ユニバーシティ・カレッジ・スクールの校長、ギイ・ケンドール、画家のW・R・シカート、俳優のアーネスト・セシジャー、そして日光連盟の会長ケイレブ・サラー、俳優のウィリアム・サラーと名を連ねていた。

幸いなことに、1937年まで活動を続けたこの団体の機関誌や大会での議事記録が、ケンブリッジ大学の図書館に保存してあった。この資料を基に、彼ら改革者たちが目指そうとしていたことを探ってみよう。

1931年6月に開催された改革服コンテストのプログラムの表紙には、彼らの不満がそのままずばり、タイトルとなっている。

「あなたは、醜悪で (Ugly)、うす汚くて (Dirty)、不健康な (Unhealthy) 服に満足ですか?」

その前年、1930年に発行された機関誌には、ジョーダン博士による現状の問題点がいかに詳しく論じられている。それを整理すると、次のようになろうか。

- ① 重すぎる。男が着る衣服の総重量は婦人の6倍もある。



ゴルフ姿のエドワード8世

- ② 窮屈である。とりわけ首まわりを襟とタイで締めるのは自殺行為である。
- ③ 不要な重ね着が多すぎる。ベストなんか廃止した方がいい。
- ④ ストープの筒みたいな長ズボンが醜悪である。短いズボンがブリーチズカートルト (スコットランドの巻きスカート状ボトム) にとって代わられるべきだ。
- ⑤ 靴は足のトラブルの元凶である。甲の部分がサンダル状になった靴を提案したい。
- ⑥ ほとんど洗濯されない黒いスーツは不衛生の極みである。ダンスで汗まみれになるにもかかわらず一度も洗濯されない燕尾服にいたっては、いったいどこに男の誇りがあるというのか?

そしてジョーダン博士は何度も大会を通して次のモットーをくり返す。

- 重ね着を減らそう。
- もっと軽い服を着よう。
- もっと清潔な服を着よう。
- もっと明るい服を着よう。

素人登場のバラエティ番組(?)

では、具体的に彼らはどのような改革服をイメージしていたのか? 1937年7月の「テイラー・スケッチ」に掲載された、MDRRP主催の改革服コンテスト

ト入賞作の写真を見たい。ちなみに左端が30年代の男が普通に着ていたスーツである。

改革服にほぼ共通するのは、首回りのゆとりと膝下から靴にかけての通気性の良さである。この2箇所が無防備な改革服である。

この改革服、たしかに着心地よさそうではあるが、リゾートやスポーツ時に着るならともかく、仕事服や社交服としては通用しにくいのではないかと感じるのは私だけではなかった。

たとえば、「テイラー&カッター」誌は、「MDRRPの提唱する衣服は、改革服ではなくて単なるリゾートウェアないしスポーツウェアであり、場の適切さ (appropriateness) を無視したものでないか」と批判するばかりか、「改革服は、イギリスの国家的産業でもあるテキスタイル産業の存続を脅かすものである」と釘をさしている。

「衣服は保護や装飾のためだけにあるのではなく、文化の象徴でもある。衣服のアナキズムは社会を分裂させる」と警告する「テイラー&カッター」誌の主張は、おそらく保守主流派の大部分の意見を代弁していただろう。

そんな批判に対して、ジョーダン博士は次のように応酬する。

① 「適切さ」なんてそもそも慣習の問題である。「これ以上醜くなりやうがないスーツ」をみんな着用している現状のほうがおかしい。

② 威厳 (Dignity) が無いというならば、ローマの元老院議員たちを見よ。彼らはゆつたりしたローブをまとうて裸足だったのに、このうえなく威厳に満ちあふれていたではないか。

③ 衣服業界の利益に関して、それこそ業界全体で改革に取り組めば、業界の活



男性服改革党 (MDRRP) が提案した改革服の数々。

性化につながり、巨大な利益をもたらすではないか。

……彼を論客と呼ぶべきか楽道家と呼ぶべきか。

ともあれ、改革服でのパーティーを催したり、コンテストを開いたり、と活発に活動した成果あつてか、賛同者は増えに増え、MDRRPはイギリス全土ばかりか、コスタリカ、カイロ、マドラス、カナダ、ベニスと海外へも支部を増やしていく。1932年の大会には、ゲストに「キモノを着た日本の詩人」も招いている。「コマイ・ゴンノスケ」氏である。ゴンノスケ氏のキモノの首まわりのゆとりを絶賛するコメントが掲載されているのがこそばゆい。

こんな改革活動を世間はどう見ていたのだろうか。

改革服コンテストはBBCでも放送された。その模様をリポートした「ザ・リズナー」誌にはこんなコメントが載っている。

「デザインはともも人々のテイストに影響を与えるものではない。それにもかかわらず、この番組は視聴者に楽しい10分間と大爆笑を与えた。」

つまり、登場する人物が大真面目であればあるほどいっそう笑いを誘うという

素人登場バラエティ番組のような見方をされていたわけである。

1937年の資料を最後に、MDRRPの活動の足跡は途絶える。39年には第二次世界大戦を迎え、衣服を論じるどころではない時代に突入し、MDRRPの活動は再び開始されることはなかった。

ダイナミックジャケットによる捷やぶり

さて、MDRRPが活動した時代、20年代から30年代といえは、メンズファッション史において欠かすことのできない、ある人物の全盛期である。

エドワード8世 (1894~1972)。王位を捨てて恋を選び、ウィンザー公となった人である。皇太子 (プリンス・オブ・ウェールズ) 時代に彼が軽やかにおこなったルールやぶりの数々こそが、20世紀のファッションルとして世界中で定着し、現代にも影響を与えている。一つだけ例をあげよう。

1933年10月、ロンドンで行われた夜会の写真には、ホワイトタイに燕尾服という大勢の紳士たちまじって、ブラックタイとダイナミックジャケット (タキシードのイギリス式呼称) の皇太子エドワードとその取り巻きが映っている。

ブラックタイにダイナミックジャケットは、当時においてはかなり大胆なカジュアルダウンに相当する。しかし、現代では燕尾服が伝統衣装の殿堂に追いやられてしまい、ダイナミックジャケットこそが夜の標準的な正装になっていることはご承知のとおり。

改革、改革と大上段に大義をふりかざさず、本流のドレスコードを優雅に逸脱しながら、人々に何の抵抗も感じさせずに衣服のカジュアル化を成し遂げてしまったエドワードのほうか、改革者として

はるかに上だったといっことである。